



青少年赤十字だより 第30号

JRCとやま

自分たちができることを



富山県青少年赤十字指導者協議会

会長 稲田 壮一
(射水市立射北中学校長)

令和2年度は新型コロナウイルスが猛威を振るい、その対応に追われた一年でした。

入学式を行ったと思ったら、3日間で臨時休業となりました。行事や大会は延期や中止、縮小しての開催と、計画は変更にくく変更になりました。

世界ではようやくワクチンが開発され、接種が始まりました。この接種をきっかけに一刻も早い新型コロナウイルスの収束を祈るばかりです。

私が勤める射北中学校では、JRCの態度目標である「気づき・考え・実行する」を、生きる力の一側面である「とらえ、本校の重点目標に組み込み、学校行事など、様々な場面で意識させ、推進しているところ」です。本校にはJ

R C委員会があり、毎年地域での活動に参加したり、福祉施設でボランティアを行ったりしています。しかし、本年度は校外での活動がほとんどできませんでした。それでも、生徒はこのコロナ禍において自分たちでできることを考え、ベルマーク収集活動を復活させ、校内備品と交換したり、福祉施設に「将棋セット」を贈ったりしました。その他にも、福祉施設に年賀状を送ったり、アルミ缶を回収したりと現在も地道な活動を続けています。

そんな中、本校の3年生が、卒業を前に地域清掃をしようと言ってきました。社会科でSDGs（持続可能な開発目標）を学習する中で、世界の現状に「気づき」、自分たちがどんな社会にしたいのかを「考え」、自分たちでできることを「実行する」ことにしたというのです。本校は県内で先駆けてJRC活動を取り入れてきた学校で、その歴史は68年に及びます。つまり、現在の生徒の祖父母の時代から活動が続いています。私はこの3年生の話を聞いたときに、「自分たちができることを考え、実行する」活動が脈々と継続され、この地に根付いている歴史を感じ、一人で感動していました。

手前味噌な話になってしまいましたが、この富山県青少年赤十字指導者協議会の活動もさらに長い歴史をもつ活動です。この活動をしたから、すぐに何らかの目に見える成果が出るというものではないと思いますが、よいものは継続していくうちに、あるときに花が咲きます。今後もよい活動が継続できればと思います。

青少年赤十字は2022年に創設100周年を迎え、2021年度はそれに向けた準備の年にもなっています。これまで活動を支えていただきました関係各位に深く感謝を申し上げます。同時に、活動の普及・推進に一層ご協力くださいますようお願いいたします。

青少年赤十字活動研究会

2月5日(金)、富山県総合教育センターにおいて、「令和2年度青少年赤十字活動研究会」を県教育委員会と共催で開催し、県内の小・中・高等学校等教員23名が参加しました。ここに、当日の講演及び活動発表の概要をお伝えします。

〈第一部・講演〉

新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！
負のスパイラルを断ち切るために！

から学ぶ赤十字の人道
日本赤十字社 富山県支部
事業推進課長 林 信宏

3つの顔・負のスパイラル

日本赤十字社は去年の3月26日の段階で、この「3つの顔」を出版し、どこよりも早くこの新しい病気から派生する社会の分断の危険性を訴えてきました。感染症が生み出す未知なる不安の集団連鎖、差別偏見によって生まれる社会の分断について、初期のころにはまだ警鐘は鳴らされていませんでした。

日本赤十字社は2月の初旬からダイヤモンド・プリンセス号に救護班を派遣していました。問題だったのは、このクルーズ船の救護に関わった人が帰還後の業務の中で差別を受けたり、幼児のお母さんである派遣メンバーが保育園から子供を登園させないと言われるような話があったという事です。

「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう」は、

20枚のスライドで構成されています。9枚目がこの3つの顔の中心をなすスライドです。

「病気」、これが第一の感染症です。新型コロナウイルスは人に染る、命にも関わる、薬がない、そんな病気です。そしてその病気によってもたらされる不安、「どうすればいいがけ」の部分、この「不安」を第二の感染症とし、そしてその不安によって引き起こされる「差別偏見」、これを第三の感染症と定義しました。

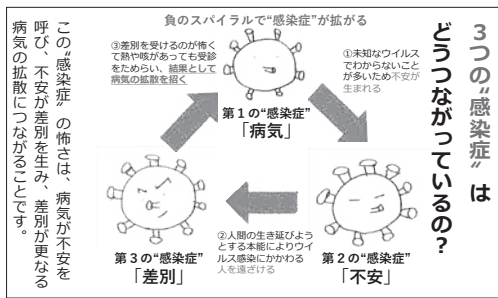
社会情勢を的確にわかりやすく説明した点や、また負の連鎖を断ち切るために自分にできることをやろうという「気づく力、聴く力、自分を高める力」に目を向けるメッセージを提示したことが、新型コロナウイルスに対する恐怖にさいなまれていた3月下旬という時期、人々に広く受け入れられたのではないかと日本赤十字社では考えています。

第二の感染症、「不安」を引き起こすその元は人間の生存本能です。不安というものは自分の身を守る、自分の大切な人を守る、という大切なものでありながら、過度の不安は自分を支える力を弱めてしまう。ちょっと声をかけられたときに「何っ！」と強く言ってしまう自分、ちょっと私今おかしいなという時のこと、思い当たるのではないのでしょうか。

そこで最近流行ってきているのが自分自身のケア、心の豊さを保つためのケア、アンガーマネジメントやマインドフルネス、ヨガなど、そうしたものに思いが向かい、心がささくれ立っていると気づいた人はそうしたもの大切にしている。でもそれは一部の気づける人だけのものではなく、皆それに気づくところへもっていきけるのではないかとというのが「気づく力、聴く力、自分を高める

力」の再確認です。

第三の感染症、「差別」、この差別も過度な防衛本能から生まれます。防ぐためには、共同して病気と闘うという姿勢を作ることが大切です。「共に」のキーワードが「Do your part」、そして「共同体感覚」です。「Do your part」一人一人ができることをする。それに「共同体感覚」他者もそれぞれの役割をこなしているという認識を持つことです。私は今自粛をして我慢している、頑張っている、手洗いを真面目にしている、マスクも鼻出しマスクにせずちゃんとかけている、だから鼻を出している人を見るとイライラしてたまらない。ですが自分は自分の役割を果たし、そして他者も同様にそれぞれのパートをこなしています。その鼻を出していること一点ですべてアウトになるような認識こそ、まさに仲間ととらえるか、敵ととらえるか、アドラーが表した「共同体感覚」を自分の中で認識できるかどうか、もっと端的に表した言葉は「互いに尊重しあえるか」これにつながっていくのではないかと思っています。



9枚目スライド

「3つの顔」
QRコードでアクセス
しPDFファイルをダウンロードできます



人道の敵を知る

3つの顔から考える赤十字の人道。これを青少年赤十字の特別授業として行いました。

「傷つき、倒れた兵士はもはや兵士ではない、一人の人間であり、敵ではない。敵も味方もなく傷ついた者は救いたい。」「この人間の思いに沿った行動をとるためには、国際的なルール、国際的な協調、これが必要だ。」アンリー・デユナンの戦場での体験が赤十字の始まりでした。この人道、人間の命と健康、尊厳、これはどんな場面でも、つまりは戦争といった究極の場面でも最後まで守られなければならない。傷つき、もう武器を持っていない兵士、これはもはや兵士ではなく一人の人間である、傷ついた救うべき同朋である、という考え、これが赤十字の根源です。

人道を守るとは当たり前のこと。人間の命と尊厳を守る、当たり前のことです。当たり前すぎて、何をすればそれにつながるのかよく分りません。そこで、「人道の敵」を知るという方法を取ってみようと考えました。この後の4つのものは人道の敵であり、人道を妨げ、傷つけるものです。これを知ることによって人道を守る行動につながるのではないかと思います。

1つ目の敵は「利己心」。アドラー心理学においても自己中心的、劣等コンプレックスなどの表現がありますが、利己的な考え方や行動、感覚、それが共同体感覚を阻害する。私が良ければよい、私が助かれればよい、私が食べられればよい、私が合格すればよい、私がレギュラーになればよい。この利己心というものがまさに人道を殺すのです。そして第2の敵が「無関心」。それ私に関係ある、聞いてない、だって言われてない、別に…、

それは利己心の裏返しにほかならないことが分かってもらえると思います。

そして第3の敵は「認識不足」。そんなこと知らない、だってそこまで習ってない、教えてもらってない、知らん私が悪いがけ、というような話です。私たちは大人になってからこそが勉強をしなければいけません。今回のコロナもそうです。知らんことだらけです、わからん事だらけです、だから知らうとするその態度は一生の態度です。その一生やっていく態度のために、小学校、中学校で、日本はその国民である子どもたちに9年間、義務教育としてその学び続け方を教えています。生涯にわたり認識不足に陥らないために。

そして第4の敵「想像力の欠如」。自分のことのように考えられず悪かったわね、あなたのことなんて考えてもいないわ、その何が悪いの。となってしまう。この想像力の欠如、ということころがアドラー心理学のまさに共同体感覚の中心になっている、といっても過言ではありません。

人道を教育の場で

自分の中の人道の敵、鬼、見たこともない会ったこともない、そんな人間はいないはず。自分だけが良ければいいとか、関係ないとか、だってあの人のせいだ、あの人が言ったんだとか、そんな思いがムクムクと心の中に現れてきた時、想像力を働かせ、ここでの出来事は私にも関わること、もうちょつと考えてみよう、他の人にも聞いてみよう、調べてみよう、人の痛みを自分の痛みと比べてみよう、人も私も良くなる方法はあるはず、あなたと私、どっちも大切だから関係ないなんて思わない、そして私たちは分からないから勉強する。

人道の敵に対したこの感覚、行動、これを教育で先生方と子ども達と一緒にやっていきたい。それを信じて学校教育と日赤がタッグを組んだのが今から100年前の青少年赤十字の起り。そう思っています。人道の敵を認識し、自分の心の鬼と向かい合った時に、その行動が取れたならば、それはもう「人道的な行動」になっていると私は思っています。

新型コロナウイルスとの関係は、今に始まった人間の問題ではなく、ずっと前から様々な場面で人間が遭遇してきた問題です。それはコロナだけではなく学校生活の中、家庭生活の中、様々な問題があるでしょう。そしてその様々な問題が不安や怖れを生みます。自分はどうなるのだろう。このときに大切なことは3つの顔の中で表現されていた「気づく力・聴く力・自分を支える力」、それに自分で気づけるような態度、そして仲間。

ここでとどめられないと、嫌悪や差別や偏見につながり、そしてその差別や偏見によってさらにもっと大きな問題に発展し、分断が促進され、不安がどんどんどんどん大きくなり、そしていじめ、暴力、犯罪、戦争へと向かっていく。きな臭さを感じる現代の不安や怖れ、それは確かに差別や偏見そして分断につながっている。ならば我々大人は決してそこへ向かわない覚悟を持たなければいけない。子ども達を絶対そこに導かないようにしなければならぬ。まさに教育のPartです。



〈第2部：活動発表〉

「気づき・考え・実行する子供の姿をめざして」
〜赤十字活動を通して

感謝の心や思いやりの心を育てる
富山市立熊野小学校 教諭 中井 幸氏

青少年赤十字の活動は、子供たちの優しさや、思いやりの心を引き出し、生きる力や人を思いやる豊かな心の育成を目的としていると思います。

令和元年度は、異学年交流を通して思いやりの心や気づき考え実行する態度を育てたいと考えました。

教育活動の中に異学年交流を取り入れることで、相手意識を持って活動に取り組み、気づきの力につながる、周囲に気を配る力を子供たちにつけることができました。

令和2年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、子供たちの交流活動に制限がかかりました。対策を取りながらの異学年交流活動を推進するとともに、感染症を含めて、自分の命を守る方法や、偏見差別をなくしすべての人の人権を守る方法を考えたいと思い本課題を設定しました。

新しい生活様式の中で、これまで行ってきた活動が十分に行えなかつた分、子供たちや教職員がアイデアを出し合い、工夫して教育活動を行うことができたと思います。今後もICT機器の活用や、オンラインでの参加の仕方などを模索して、これまでと違う形でも子供たちの達成感や満足感が得られる教育活動を展開していきたいと思えます。



日本赤十字社富山県支部 特別授業

令和2年度、富山県内の小中学校で「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう!」のオリジナル教材を使った特別授業が行われました。各学校の生徒たちは授業を通して病気としての怖さと共に、差別・偏見についても深く学び様々なことを考える機会となりました。

〈小学5年生 T・Hさん〉

新型コロナウイルスは病気の苦しみ以外にも不安や差別などの感染症があることが分かりました。また、その感染症を防ぐために、気づく力・聴く力・自分を支える力を大切にしたり、一度冷静になって考えたりすることで感染症を防ぐことができるということが分かりました。

〈中学1年生 M・Rさん〉

感染症は病気そのものの他にも、心理的なものもあると分かりました。そして病気そのものより、心理的な感染症の方が感染しやすいと聞き、確かにそうだと思います。ウイルスは見えないから、ウイルスへの不安を感じる対象にぶつけると聞いて、人間の弱さを感じました。その差別や偏見によって、さらに病気そのものが拡散してしまうのはとても大きな問題だと思います。差別や偏見をなくさないと、コロナもなかなか収束しないことにも気づきました。



氷見市立十三中学校での講演会の様子(写真上) 射北中学校での講演会の様子(写真下)

令和2年度青少年赤十字研究会に参加して

東部教育事務所 指導主事 細野 祐輔



〈令和3年1月8日に、「令和2年度青少年赤十字研究会」がWEB会議にて開催されました。〉

1月8日、青少年赤十字研究会に参加しました。今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、富山県支部でのリモート開催であり、内容は講演、実践発表、グループワークという約2時間の研究会でした。

実践発表では、青少年赤十字(JRC)への加盟のメリットについて紹介されました。その際、頭に浮かんだのは小・中学校の新学期指導要領です。今回の改訂において小学校社会科では防災・安全に関する内容の充実、中学校社会科では防災学習の重視が示されています。「頻発する自然災害に対応した人々の暮らしの在り方を考えることは、我が国で生活する全ての人々によって欠くことのできない『生きる力』である」とされています。

JRCには多くの映像、教材、体験プログラムが用意されており、積み重ねてこられた実践があります。富山県支部でも、防災講演等をはじめ様々な活動に熱心に取り組んでおられます。より効果的・効果的で、質の高い防災教育を目指し、実際にJRCのコンテンツを積極的に取り入れ成果を上げていく学校の取組を紹介したり、JRCと学校現場との橋渡しをしたりすることが指導主事としての役割であると再確認した研究会でありました。

青少年赤十字賛助奉仕団委員長より



小林福治先生



令和2年11月29日(旧)に、富山県総合福祉会館で令和2年度「青少年団体・グループ、青少年及び青少年指導者等の顕彰」の表彰式が行われ、賛助奉仕団委員長である小林福治委員長が受賞されました。

小林委員長は、教員時代から退職後の現在に至るまで、長年にわたり青少年赤十字及び赤十字活動に携わり、学校教育現場での赤十字精神・活動普及に尽力されました。校長時代を通して、自校での青少年赤十字実践活動（地域赤十字奉仕団と連携した防災訓練やひとり暮らし高齢者訪問など）に努めるとともに、青少年赤十字指導者協議会の役員（会長・副会長・理事）として、県内各校での実践普及に取り組み、青少年赤十字加盟を推進されました。

また、教員退職後も青少年赤十字賛助奉仕団に所属し、平成22年度からは10年以上にわたり同委員長を務め、継続して青少年赤十字の普及に深く携わっていただいております。

この度は栄えある受章、誠におめでとうございます。

「結いの心」でJRCを支援します

富山県青少年赤十字賛助奉仕団 委員長 小林福治

私が生まれ育った五箇山は、今では世界遺産として多くの方々に知られています。豪雪地帯で暮らす先人の知恵の結晶が合掌造りです。茅葺きの屋根は約20年に一度、葺き替えます。家族だけでは出来ない仕事なので晴れた日を選び、村中の人（子供も含む）が茅葺き屋根の葺き替えに集まります。他人事とせず互いに助け合う「結いの心」を守り続けているからこそ世界遺産として今があるのだと思います。

そんな「結いの心」が身体に染みついているのでしょうか、日本赤十字社の活動に参加して40年余り経ちます。

さて、全国組織である青少年赤十字賛助奉仕団その活動は、他団体・学校・教育機関にあまり理解がされていないようです。団員は、青少年赤十字指導者協議会を退任した者で組織しています。本県の場合、30名余りの団員がJRCの活動を支援しています。夏のトレセンや地域での炊き出し訓練・着衣泳の学習・高齢者宅訪問、等々の手助けをしています。また、各学校を訪問しJRCへの加盟や活動のPRに努めております。JRC加盟校に対しては、加盟しただけではなく「青少年赤十字の精神」を実践していただける学校を増やすための啓発活動も行っています。

学校の「教育目標」と青少年赤十字の「態度目標（気づき・考え・実行する）」は重なるところが大きいと思います。目標の根底にある精神は「世界の平和と人類の福祉」です。無理なく学校経営に取り入れることが出来るので、JRC活動を「負荷」と捉えず「付加」として受け入れていただければと思います。「結いの心」で児童・生徒の「生きる力」を育む教育活動を支援します。

青少年赤十字防災教育

今年度は、「3・11」の東日本大震災が発生して10年を迎えました。10年を迎える直前の2月13日に福島県沖で最大震度6強の地震が発生しました。

今回の地震もまだ東日本大震災の余震と言われています。10年経過しましたが、まだ避難をしている方もおられ、震災の被害はまだ続いています。

日本赤十字社では、児童・生徒が自然災害の学習と対策について主体的に取り組むことを目的に、「まもるいのち ひろめるぼうさい」（小・中・高校用）を作成し、各学校での防災教育の教材として活用してもらっています。また、幼稚園・保育園向けの教材として「ぼうさい まちがいがさがし」も作成しています。この教材には地震や風水害等が発生した直後のイラストを見ながら、災害時の危険な場所や行動について園児自ら発見し、学べるという特徴があります。

富山県支部でも、貸し出しや配付できる教材がありますのでぜひご利用ください。



教材は小学1～3年生用・小学4～6年生用・中学・高校生用の3種類で構成されています

青少年赤十字国際交流事業

日本赤十字社は、青少年赤十字の実践目標の一つである「国際理解・親善」を目的に、「青少年赤十字国際交流事業」を隔年で開催しています。

これまでは海外の青少年赤十字・赤新月メンバーが来日し対面での交流を行ってきましたが、新型コロナウイルスによる感染拡大の影響で、50年の歴史上初のWEB国際交流集会として、11月15日(日)に行いました。

富山県からは2校が参加し、17の国および41の都道府県支部から、約300人の高校生たちが参加しました。プログラムでは、各都道府県や各国の文化紹介、青少年赤十字の活動の紹介、赤十字○×クイズや、ガイド「3つの顔」教材をもとに新型コロナウイルス感染症にどのように向き合うか、またそれに付随する偏見や差別をなくすためにはどうしたらよいか等の意見交換を行い今後の青少年赤十字の活動を考えました。



Web国際交流に参加して
富山県立高岡西高等学校
2年 小原 椋那

初めて県外や外国の同世代の方々と関われる機会をいただき、とても貴重な経験をすることができました。

コロナ禍で私たちが以前から取り組んでいたボランティア活動ができなくなっていた中、この交流会を通して、同じ今を過ごす世界の学生が、どのようにその国で活躍しているのかを知ることができ、その姿に刺激を受け、学ぶことがとても多かったです。私たちが活動していたこと(マスク作り)以外にも、国のためにできることをそれぞれが行動に移していることを実際に写真で見たり、話を聞いたりして、今後の私たちの活動にも繋げられるよききっかけとなりました。またクイズなどを通して楽しみながら各都道府県、各国のボランティア活動の様子を知り、リモートではありますが、一緒に世界の方々と繋がっていると感じました。さらに、実際にニューヨークで診療している永井医師のお話の中で、今の新型コロナウイルス感染症の現状をポジティブに捉えていることを聞いて、私たちがこれまでの生活様式を変えて、行動しなければならぬと感じるとともに、私た

令和3年度 トレセンのお知らせ

令和3年度は、小学校が7月28日(水)から7月29日(木)まで、中学校・高等学校が7月30日(金)までの日程で、富山県砺波青少年自然の家を会場に予定しています。令和2年度は中止となりましたが、3年度については、5月に行われるJRC指導者協議会総会で開催の可否を決定する予定です。開催につきましては、決定後ご連絡いたします。



コロナ下におけるJRCの役割
荒井学園 高岡向陵高等学校
2年 西尾 絢翔

ち学生が今回の交流会で学んだことを地域に積極的に発信していくべきだと思います。

青少年赤十字国際交流プログラムに参加させていただいた時、私はJRC部に入って間もない頃でした。このプログラムで、日本各地の赤十字都道府県支部、そして世界各国の赤十字社とZoomで繋がり、話し合いがもてたことは私にとって非常に心に残る体験となりました。

このプログラムの中心では、新型コロナウイルスの感染について話し合いました。生活や活動が制限されている中でも、日本各地のJRCメンバーが行っている地域貢献活動を知ることが出来ました。また、感染状況が異なる各国のそれぞれのユースメンバーの活動を直接教えていただけ良い勉強の機会になりました。特に、コロナ対策に関する話し合いでは、全国はじめ海外のメンバーから様々な提案があり、政府や企業と協力して積極的に感染対策に関わっている赤十字ユースボランティアの方の話聞いて、行動力のすごさを実感しました。

新型コロナウイルス感染症拡大の今の状況から解放され、以前のような通常の生活を取り戻すには、まだ長い時間と人々の忍耐が必要だと思います。しかし、これはJRCのメンバーとして活躍できる絶好の機会とも言えるでしょう。制限された活動の中でのあらゆるボランティア活動を通して、より多くの人々を支えることが私たちの役割だと思えます。そして、一日も早く終息するようにと祈りながら、今後もJRC活動に積極的に活動していきたいと思えます。

青少年赤十字「活動推進校」が「活動実践校」に変わります

平成9年度から令和2年度まで、「活動推進校」として2か年の研究推進に取り組んだ学校は、延べ49校にのびります。

学校教育の中に赤十字のエッセンスを取り入れて、様々な教育活動に活用された成果や課題をまとめ、青少年赤十字活動の普及・充実に大いに貢献していただきました。

令和の時代を迎え、より多くの学校が取り組みやすく、実践事例や活動アイデアを広く集めた「青少年赤十字の活かし方ガイド」となることを目標に、令和3年度から「富山県青少年赤十字活動実践校」として改定実施いたします。

◆活動実践校とは

これまでの2か年にわたる網羅的な研究形態から、一つの行事等に焦点を当て、JRCの実践目標や態度目標を意識した実践に取り組みます。

- (1) 指定期間 単年度
- (2) 実践テーマ 既存の学校行事や教育活動なども幅広く取り上げ、JRCの要素を加味します。
- (3) 報告書 見開き2ページの実践紹介を報告書とします。
- (4) 助成金 2万円を交付します。
- (5) 指定順 年度ごとの指定地区を事前に取り決め、年度当初に地区の校長会等で実践校を指定していただきます。
- (6) その他 各校の報告書を取りまとめ、青少年赤十字活動実践集を毎年発行します。

◆実践例

青少年赤十字の実践目標「健康・安全」、「奉仕」、「国際理解・親善」や、夏休みに開催される「リーダーシップ・トレーニング・センター」、防災教育教材「まもるいのち、ひろめるぼうさい」、「地域赤十字奉仕団との連携」など、各学校の実態に即した活動に、赤十字のエッセンスを加味した実践活動です。

以下は、実践テーマの例示です。

『あいさつ運動』

～支えあう人間関係の構築～
校区小中学校や地域住民と連携した活動（国際理解・親善）

『高齢者・幼児施設訪問』

～気づき・考え・実行する態度の育成～
人に関心を持ち、想像力を使って、喜んでもらえる、負担に感じさせない活動の工夫（奉仕）

『安全衛生活動』

～健康に暮らすために～（感染症の予防・けが



の防止など)

自分自身を大切にし、他者ともに安全普及につながる活動の工夫（健康・安全）

『防災教育』

～まもるいのち、ひろめるぼうさい から～
ワークシートを使って訓練前に学習することで、「あぶないものから離れる」基本をふまえた避難行動につなげる実践（防災）

『JRCトレセンへの参加』

～トレセンの経験を学校生活に活かす～
ワークショップで作った計画に仲間を巻き込む提案と行動（トレセン）

『地域赤十字奉仕団との連携』

～地域の赤十字活動体験による郷土愛とボランティアへの気づき～
ひとりくらし高齢者訪問、海外助け合い募金、炊き出し訓練、献血呼びかけなどの共同実施によるボランティア体験（奉仕・総合的な学習）

など

令和3年度JRC活動計画

4月	令和3年度 活動実践校指定 指導者協議会 理事会・総会（日赤県支部）
5月	指導者協議会 理事会・総会（日赤県支部）
6月	全国指導者協議会総会（日赤本社） 第3ブロック指導者協議会長及び支部担当者研究会 （三重県） トレーニング・センター指導者養成講習会 （日赤本社・WEB）
7月	全国賛助奉仕団協議会（日赤本社） リーダーシップ・トレーニング・センター（砺波市） 県下小・中・高等学校の青少年赤十字メンバーが 集まり、共同で生活する体験学習です。チャイム や指示がないため、自分で考えて行動することに よって、参加者の自主性を育てます。
9月	指導主事対象 青少年赤十字研究会（日赤本社） 青少年赤十字活動研究会（富山市） 教職員を対象に、広く青少年赤十字活動を学び、 普及することを目的とした研究会です。
1月	青少年赤十字活動研究会（富山市） 教職員を対象に、広く青少年赤十字活動を学び、 普及することを目的とした研究会です。
3月	高校生対象 スタディー・センター（山梨県） 高等学校青少年赤十字活動の中心となるリーダー の養成を図ります。

青少年赤十字への加盟について

青少年赤十字は、学校教育の場に組織され、教師が指導者となって、児童・生徒とともに活動に取り組めます。

青少年赤十字に加盟されると、定期刊行物や資料・教材の無償提供、指導者対象の講習会に関する案内、小・中・高等学校の青少年赤十字メンバー対象のリーダーシップ・トレーニング・センターに関する案内等がありますが、「これをしなければならぬ」といった義務のようなものではありません。地域や世界の人びとの平和や福祉に貢献するような活動を学校の裁量で自由に行うことができます。なお、加盟登録する上で、経費は一切かかりません。

各学校の教育効果を高めるため、ぜひ青少年赤十字をご活用ください。

令和2年度
新規加盟校

滑川市立東加積小学校

校長 寺島 紀子
全校加盟



発行・編集

富山県青少年赤十字
指導者協議会
日本赤十字社富山県支部

〒930-0821富山市飯野26-1
TEL076-451-7878 FAX076-451-6872
<https://www.jrc.or.jp/chapter/toyama/>

青少年赤十字加盟校状況（令和3年3月31日現在）

校種	校数	メンバー数
幼稚園・保育園	14園	1,337名
小学校	134校	25,739名
中学校	74校	25,562名
義務教育学校	2校	353名
高等学校	13校	1,658名
特別支援学校	5校	233名
計	242校	54,882名